SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

地域とつながる音楽文化関連授業

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7189

地域とつながる音楽文化関連授業

音楽教育講座　小西　潤子

はじめに

音楽文化関連授業として実施しているものは、何らかのかたちで地域とつながるものの方が多い。以下であげる実践例は、今年度新規に行われたものに限ることにする。これらは、内容的にも連携相手も多種多様である。いずれも単発的ではあるが、中には継続可能なものもある。とはいえ、これらは学生にとっての経験の機会と幅を広げるのに大いに有意義であったと考えられる。

１．森の音あそび

これは、ＮＰＯ法人しずおか環境教育研究会（以下、エコエデュ）主催によるサウンドスケープ関係のイベントである。エコエデュは、これまでにもしずおか里山体験学習施設・遊木の森で2010年2月6日(土)にイヤーゲーム創始者の長谷川有機子氏を招いて「音のワークショップ～心の耳を育てる」を実施している。イヤーゲームとは、森羅万象に耳を澄まして五感を目覚めさせ、感じたことを表現したり、互いに分かち合うことで、心と身体の感性をよみがえらせるプログラムのことである。これを受けて、2010年4月24日に遊木の森で「森の音あそび」を実施することになった。

一方、私が担当する博物館実習では、今年度から初めて本川根町にある音戯の郷での実習生受け入れが決まった。当該施設は、日本でも類のない音に特化した施設である。それに先立ち、実習希望学生には音やサウンドスケープへの関心を高めてもらいたいと考えていた。エコエデュのイベントは、時期的にも内容的にもこの目的にかなうものであった。そこで、博物館実習および文化芸術事業実習を選択する学生有志からなる７名の学生とともに本イベントに参加した。

エコエテュのスタッフの指導により、まずは遊木の森の自然環境に気づくことから始まった。日常的には見過ごしてしまう身近な自然を発見したり再発見したりして、参加した子どもたちともども新鮮な気持ちになった（写真１）。次に、全員が目隠しをして一列になり、前の人の肩を持って音を頼りに歩いた。（写真２）。どこまでも遠くまで歩いた気になったが、目隠しを取るとほとんど移動していないことがわかった。それから、少し山の上まで移動した後、音を聴いてそれぞれがイメージをスケッチすることになった。小さな子どもは、音のスケッチというのがわかりにくかったのか「お絵かき」タイムになってしまったきらいがあったが、やってみると意外におとなにも難しかった（写真３）。この頃、少し雨がパラパラ降ってきたこともあって、少し集中度が落ちた。最後に、また下に下りて各自が音を探した（写真４）。そして、グループに分かれて合奏する試みをした。

サウンドスケープ活動としては入門的な試みではあったが、恵まれた自然環境の中で精神的にも開放感があった。

写真 1　身近な自然に気づく

写真 2　音を頼りに目隠しで歩く

写真 3　音のスケッチをする

写真 4　音を出す

2．浜松花蝶ちん

2010 年 5 月 10 日、全学共通教育科目の芸術論にちんどん屋グループ・浜松花蝶ちんを招聘して、実演を交えながらお話をしていただいた。メンバーは、50 歳代半ばを中心とする会社員、主婦、保育士、元警察官など多様である。座長の藤田潤吉氏と知り合いになったことから、急遽この「特別講義」が決まったのである。ちんどん屋は、現在パフォーマンスとして「復活」しており、藤田氏によるとちんどんサークルがある大学もあるという。しかしながら、宣伝のプロフェッショナルとしてのちんどん屋を生で見る機会は、学生の世代ではほとんどないであろう。そうしたものめずらしさに加えて、ちんどんの音楽は、日頃学生たちが接している音楽とは本質的な違いがある。すなわち、ちんどんの美学は一般的な音楽美学では語れないという特徴があるのである。そもそも、宣伝のために人を惹きつけることを目的としているちんどんの場合、演奏が上手ければよいというわけにはい

かない。

花蝶ちんのメンバーに「なぜちんどんをするのか？」とインタビューすると、意外にも「変身願望」によることがわかった。これほどまでの変身をすると、一体誰だか見当もつかなくなる。日頃の職業や生活とのギャップがあればあるほど、本人にとってはよいストレス発散にもなるだろう。また、音楽とのかかわり方としても「楽しむ」ことを第一にしているところがあげられた。もちろん、演奏は上手いに越したことはないのであるから、メンバーも演奏技術の向上に努めていることであろう。しかし、その精神性に面白さがなければ、ちんどんとしては成り立たなくなる。

まじめに、かつ面白いちんどんの世界は、学生にとって少なからずカルチャー・ショックを与えるものであった。浜松花蝶ちんは、身近なところにある異文化だといえよう。藤田氏は、しきりと学生にもちんどんを進めていたが、ひょっとすると授業に参加していた学生の中から何年か後にちんどんをしている者が排出されているかも知れない。

写真 5　大学会館にちんどんが来た

写真 6　コント 55 歳？！

写真 7　どこまでも派手に

写真 8　ちんどんの体験

３．能楽師との交流事業

これは、財団法人静岡県文化財団がこれまで日本伝統音楽振興のために行ってきた事業の一環である。2002 年度以来、静岡大学教育学部は財団法人静岡県文化財団の運営するグランシップにおいて、音楽文化専攻の学生を中心に学芸員実習科目としての文化芸術事業実習の受け入れをお願いしている。実習生の関わる事業の１つとして「能楽鑑賞教室」があり、これまでも実習生がこの参加者（特に子ども）への対応にあたるなどしてきた経緯もある。加えて、2009 年 1 月 26 日には同財団のアウトリーチ事業の一環として、小鼓方大倉流 16 世宗家・大倉源次郎御家元を静岡大学の授業にお招きしての実践的講演をしていただいた。

今年度は、12 月 12 日に同財団の事業として若手能楽師との交流事業が実施された。これは、同財団事業に関わってきた学校教育機関等を対象に行われたものである。同財団としては、このような事業を通じて多くの若者が伝統文化に関心を持ってもらいたいとのねらいがある。当日、2 名ではあったが静岡大学教育学部学生も参加し、身近なところで伝統文化の担い手と直接接することができた。

写真 9　若手能楽師の話を聞く

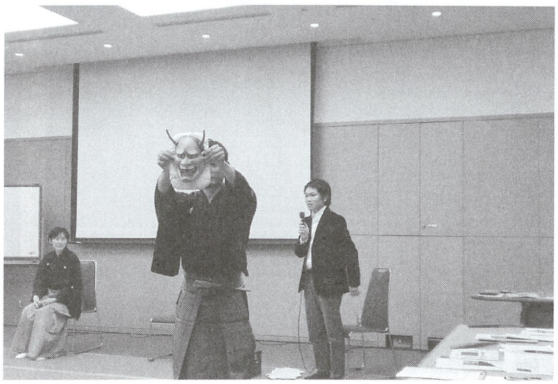

写真 10　能面を披露

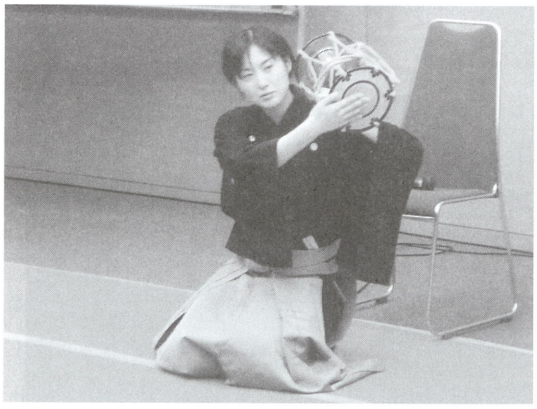

写真 11　小鼓のデモンストレーション

写真 12　特別なデモンストレーション